慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランスのベトナム侵略と福澤諭吉：「脱亜論」再考
Sub Title	
Author	渡邊, 俊一(Watanabe, Toshikazu)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1991
Jtitle	近代日本研究 Vol.8, (1991.) ,p.115- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19910000-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランスのベトナム侵略と福澤諭吉

「脱亜論」再考

渡邊俊一

序

明治一八年三月に時事新報紙上に掲載された福澤諭吉の「脱亜論」は、従来のアジア連帯論から西欧諸国に追随してアジア侵略を主張する脱亜論への、彼の対外論の転換を象徴する論文として有名である。この論説文は朝鮮に対する彼の干渉の試みが失敗した甲申事変後の、福澤の一連の中国への強硬論の最後のものとして書かれたものである。その結果、彼の対外論の転換は対朝鮮・中国政策との関連において論じられることが多い。しかしながら、すでに多くの研究者が指摘(1)しているように、日本はアジアと絶縁し今後は西欧と同様な姿勢でアジア諸国に対応すべきだという彼の主張は、その一年半ほど前から時事新報上において度々表明されていたものなのである。それならば、「脱亜論」によって福澤は転換したとする通説には、疑問が生じることになる。以前にこの問題を詳しく追求した研究はなかった。私はこの論文で、福澤の対外論の転換は中国や朝鮮に対する彼の政策的関心や評価の変化によって生じたものではない、明治一六年から一八年までの現在のベトナムの安南に対する、中国との戦争を伴ったフランスの露骨な侵略的政策(2)によって引き起こされたものなのである、ということを論証するつもりである。一八八三年頃を起点として西欧列強による世界的植民地獲得競争により新たな帝国主義時代の幕が開かれた。この様な世界情勢の重大な変化をいち早く見抜いた福澤は、日本の独立に対する危機感を募らせて対外論を大きく転換させたのである(3)。その転換を代表する最も重要な論文は「脱亜論」ではなく、キリスト教の容認を主張した「宗教も亦西洋風に従はざるを得

ず」[4]である。

この論文の最初の章では、この時期の彼の文章における、フランスのベトナム侵略と清仏戦争に対する反応と、その結果生じたと思われる対外論の変化の跡を、詳しく追跡していくことにする。その際に、同時代の英字新聞ジャパン・ウィークリー・メイルの清仏戦争関係の記事も、参考として随時紹介する。「この戦争は日本人に西欧の侵略性への恐怖と中国の無力さへの侮蔑を教えた」と後に総括した、メイルの戦争関連記事が私に、清仏戦争が当時の日本人の意識に与えた想像以上に大きな影響に気づかせてくれたからである。この時代においては英字新聞は海外事情の情報源として大きな役割を担っていた。特にメイルはロイター通信社と正式に契約してその電信を掲載するなど、その記事の正確さと質の高さ[5]は群を抜いていた。その編集長のフランシス・ブリンクリーは日本語に通じ、後にはザ・タイムズの日本通信員をも兼務した優れた日本研究家兼ジャーナリストであった。『時事小言』をいち早く訳して海外に紹介[6]するなど、福澤諭吉を優れた思想家として高く評価し、時事新報上の彼の論説を数多く翻訳しメイルに掲載していた。その清仏戦争関係の記事も、当時日本で得られた最も充実したものであると私には思われる。

次の章では、「脱亜論」が福澤の対外論を代表する論文ではないと主張する根拠を示し、この論説を転換の象徴とすることによって生じた、福澤の対外論の研究における影響について検討する。そして、キリスト教容認論の「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」を、真の意味での対外観の転換を代表する文章とする論拠について説明する。

(1) 青木功一「「時事新報」論説の対清論調（一）」（『福澤諭吉年鑑』第六巻）当時の時事新報紙上の彼の論説を詳しく検討した青木氏は「脱亜論」を「従来の論と比べて特に新味はない」と形容している。橋川文三氏も「福澤諭吉の文明論」（『橋川文三著作集』第七巻（筑摩書房）一九八六）において、「その論旨も、この前後に福澤が何十篇となく書いている論文と大差ない」としている。初瀬龍平「「脱亜論」再考」（『近代日本とアジア―文化の交流と摩擦』（東京大学出版会）所収）「一八八五年の「脱亜論」と同じ趣旨の発言は、それ以前にも散見される。」

(2) フランスのベトナム侵略が福澤の転換に与えた影響を重視する研究として、シン・ビン「明治日本とその国際環境」（『近代日本研究』第三号（慶應義塾福澤研究センター）一九八六）がある。福澤のキリスト教容認論が脱亜的転換と深くかかわっているとの指摘や、福澤が脱亜を主張したのは、日本の独立を重視したからであるとの理解などは、私の見解と極めて近いものである。しかしながら、シン・ビン氏が福澤の脱亜的対外観への転換において、甲申事変における挫折を第一の要因として清仏戦争の影響の上に置いていること、その結果、「脱亜論」を対外論の転換の「頂点」を成す「重大な意義をもつ著作」であるとしている点において、

私の理解と異なっている。

(3) このような福澤の転換についての理解は、すでに丸山真男氏の旧『福澤諭吉選集』(岩波書店) 第四巻 (昭和二七年) の解題において示されていたものである。しかしながら、この理解の方向にそっての、福澤の対外論についての研究を深める努力は、余り試みられなかったように見える。

(4) 「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」の対外論における重要性について眼を開かせてくれて、私がこの論文を書く際に最も教えられるところが大きかったのは、坂本多加雄氏の「福澤諭吉「脱亜論」をどう読むか?」(『文化会議』(日本文化会議) 平成二年七月) であった。坂本氏の「宗教も亦キリスト教に従はざるを得ず」のキリスト教容認論が対外論の転換に密接に関連していたことの示唆や、この論説や「開鎖論」を執筆していた時期の福澤は異常に切迫した対外状況認識にあったとの指摘、さらに「この時期の福澤が、西欧の眼に映じる日本のイメージの向上ということを念頭に置いて外交論を展開していた」という言葉などは、私が漠然と認識していた福澤の対外論の転換と清仏戦争との関連について、理解の中心の核となる手がかりを与えてくれたのである。しかしながら、「脱亜論」を「福澤自身の外交論が、アジア連帯論から大きく転換したことを象徴する文章」と重視している点や、福澤の当時の関心として条約改正問題を重視している点で、私の理解と相違する結果となった。

(5) ブリンクリーの参考文献としては、以下のような不十分なものしかない。昭和女子大学『近代文学研究叢書』第一三巻 (昭和三四年)、蛯原八郎『日本欧字新聞雑誌史』(大誠堂、昭和九年)、渡邊俊一「チェンバレンとブリンクリー」(『比較文化雑誌』第四号 (東京工業大学比較文化研究室) 一九八九年)

(6) 早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインに宛てた福澤諭吉の書簡について」(『年報・近代日本研究2・近代日本と東アジア』(山川出版社) 一九八〇年) において、メイルに翻訳された『時事小言』が、伊藤博文が憲法研究の際に最も頼りにした、高名なオーストリアの法律学者フォン・シュタインの激賞を受けた事実を紹介している。

＊以下の文中における福澤諭吉の引用文については、直後の括弧内に岩波書店版の全集の巻数と頁数を示すことにする。

一　福澤の対外論の変化

清仏戦争の直前の時期においては福澤は西欧の東洋進出の脅威を説き、日本が盟主となりアジア諸国が連帯してそれに対抗すべきことを説いていた。明治一四年一〇月の『時事小言』や翌年三月の「朝鮮の交際を論ず」における次のような言葉はそれを明確に示している。

「方今西洋諸国の文明は日に進歩して、其文明の進歩と共に兵備も亦日に増進し、其兵備の増進と共に併呑の欲心も亦日に増進するは自然の勢にして、其欲を逞ふするの地は亜細亜の東方に在るや明なり。」(八巻、三〇ページ)、「方今東洋の列国にして、

文明の中心と為り他の魁を為して西洋諸国に当るものは、日本国民に非ずして誰ぞや。亜細亜東方の保護は我責任なり」（五巻、一八六ページ）、「亜細亜州中、協心同力、以て西洋人の侵凌を防がんとして、何れの国かよく其魁を為して其盟主たる可きや。我輩敢て自から自国を誇るに非ず、虚心平気これを視るも、亜細亜東方に於て此首魁盟主に任ずる者は我日本なりと云はざるを得ず。」（八巻、三〇ページ）

しかし西欧の脅威をそれほど差し迫ったものと見ていた訳ではない。

「今西洋の諸国が威勢を以て東洋に迫る其有様は火の蔓延するものに異ならず。然るに東洋諸国殊に我近隣なる支那朝鮮等の遅鈍にして其勢に当ること能はざるは、木造板屋の火に堪へざるものに等し。」（五巻、一八七ページ）、すなわち西欧の脅威は、直接には支那朝鮮に対するもので、日本における危険は類焼によるもので、しかも「極度の不祥を云へば」という但し書きのつく、間接的で可能性の少ないものと判断されていた。なぜなら、明治一一年の『通俗国権論』において、「欧州各国の交際は、恰も禽獣の餌食を争ふものにして、互ひに相睥睨して寸隙を示すこと能はず。欧州の実力は正に欧州の自家に費して余りあることなく、東洋諸国に対しては、唯此実力の余光を用るのみ、あるひは真を西に用いて影を東に示すものと云ふも可ならん」（四巻、六三七ページ）と述べているように、西欧の各国は欧州における対立にその実力の大部分を向けており、東洋への脅威は「虚喝」を用いたその影に過ぎないと見ていたからである。それ故フランスのベトナム北部のトンキン侵略が本格化した当初においては、福澤は西欧の侵略よりはアジアの盟主の座を争う中国の脅威に対する警戒の必要を主張していたのである。

既に一八六〇年代にベトナム南部のコーチシナを確保していたフランスのベトナム侵略が再開されるのは、一八八二年のリヴィエール大佐指揮下の軍隊によるハノイ占領からである。しかし、リヴィエールは翌年五月に当地のゲリラ的組織黒旗軍の待ち伏せ攻撃に遭い戦死してしまった。この屈辱的事件は普仏戦争敗北による傷跡がまだ癒えない、フランス人の誇りへの大きな打撃となった。自尊心を傷つけられたフランスの社会において、好戦的感情が噴き出した。ジュール・フェリー内閣の侵略的政策は世論の圧倒的な支持を集め、議会もトンキン遠征費の支出を圧倒的多数で承認した。メイルのフランス通信員はその様子を次のように報じている、民衆は街頭で「フランスの名誉」や「フランス人の血の償い」を求めて騒ぎ、議会に根強かったベトナム派兵に対する反対論も感情的議論の為に一掃されてしまった。(1)

福澤がはじめてフランスの安南侵略についてとりあげた一八八三年六月九日の論説「安南の風雨我日本に影響すること如何」においては、「安南は遠方の国にして其国が仏蘭西の為に滅さるゝも又保護せらるゝも、固より以て吾人の痛痒とするに足らず。」(九巻、一九ページ)としてフランスの行動に全く危機感を示していない、むしろフランスとの対立を深め戦争準備を整えつつある中国の動向に警戒感を示していた。一五日の「調和の急は今日にあり」や一八日の「不慮に備予するの大義忘る可からず」においても、中国に備えての官民調和や軍備増強のための増税を唱えていた。八月一六日の「沖縄想像論」や九月四日の「支那との交際に処するの法如何」も中国警戒論である。

しかしその後のフランスの行動は福澤の安南紛争に対する見方を一変させた。フランスはそれまで紅河の航行の安全確保の実現とか、中国に対する安南の完全独立の承認の要求などという目的を掲げて、ベトナム北部のトンキンで中国の支援を受けていた黒旗軍と戦っていた。しかし八月一八日に、そのような建て前を放棄して、そのために戦っているはずの友好国の安南の首都ユエを攻撃して、自己の要求を盛り込んだ条約を安南政府に強制して実質上の支配下においた。この事件を九月一日にメイルは、「フランスは安南におけるゴルディオスの結び目(Gordian knot)を直接ユエに向かいそれを占領することによって一刀両断した」と報じ、フランスのこの露骨な背信的行動により、「中国の外国人に対する印象は決定的に悪化した。今後中国は西欧の正義の観念などという話をまともに受けとることはないだろう。」と述べている。このフランスの国際法も道義も無視した露骨な侵略行動は、英国人のブリンクリーにとっても衝撃的なものであった。

九月の二四日から時事新報に掲載された「外交論」は明らかにこのフランスのユエ占領の衝撃から生まれた論文である。その第一編「文明の利器その働を逞ふして各国の交際次第に劇を加ふ」の冒頭で世界の状況は、「禽獣相接し相食むものに異ならず」(九巻、一九二ページ)として、弱肉強食のジャングルの掟が国際関係を支配しているとの見解を表明している。以前にはイギリスがインドを占領するのに非常に永い年月を要したのに、今回はフランスは蒸気や電信の力により僅かに三カ月で安南を征服してしまったと述べて、文明の発達により国際環境が劇的に変化してしまったことを指摘している。そして今や文明国は日本の戦国時代のように世界中で領土獲得競争を繰り広げているとして、日本にも警戒を呼びかけている。第二編「世界の時勢次第に切迫に際し我が進退を決すること緊要なり」において次のように述べている。文明国が東洋の国に対するときには、例えれば狩人が獲物を狩るように少しも愛憐の情を示さない。「世界各国の相対峙す

るは禽獸相食まんとするの勢にして、食むものは文明の国人にして、食まるゝものは不文の国」（九巻、一九五ページ）である、日本は文明国の列に加わり食む方に入るか、アジアの国と共に食まれる方に入るか、「二者其一に」決めなければならない。むろん答は食（は）む方に入ることであるが、それは言うは易く行うことは困難である。日本の制度習慣を勉めて西洋風にして「亜細亜の東辺に純然たる一新西洋国を出現する」（九巻、一九六ページ）程の大英断が必要であると主張している。遠山茂樹氏が『福澤諭吉』（東京大学出版会）で述べたように一年半後の「脱亜論」の主旨はここに現れている。他の多くの研究者もこの「外交論」が脱亜論の先駆となる文章であることを認めている。[2] しかし遠山氏のように、この文を直ちに「帝国主義国の陣営に加わって侵略者となるほかない」という決意と解釈するのは疑問である。福澤はこの時期は他を食むことよりも、西洋列強に食まれないことを第一に考えていたと思われる。この文章の切迫した緊張感に満ちた調子は、西欧化を徹底させるしか他に道はないという危機感を現している。「文明の国に交り文明の人を親しみ、其書を読み其文を講じ、其事を行ひ其器械を用ひ、政事法律学問教育の根本より商工殖産の業に至るまで、一切万事西洋文明の旨に戻ることなくして、亜細亜の東辺に一新西洋国を始創せんことを勉めざる可らず」（九巻、二〇三ページ）という結論部が、日本の侵略国となる決意の表明とは思えない。

この「外交論」は従来の福澤の安南紛争観を一変しただけではなく、彼の国際関係観にも大きな転換を迫り、国内の重要問題に対する姿勢にさえも根本的修正を加えることになる、福澤の転機を画する重要な論文である。安南紛争について言えば、この紛争において警戒すべきは日本に敵意を抱く中国の動向であるという、六月以来の持論は完全に放棄された。西欧列強の東洋進出について福澤は以前から警告を発していた、しかしながら其の脅威は未だ実体の伴わない影に過ぎなかった。しかし安南紛争に於けるフランスの行動は其の脅威が予想以上の緊急性を持って現実化したことを、福澤に認識させたと思われる。この時フランスは安南政府を脅迫してアルマン条約を調印させ、ビノトゥアン省を仏領コーチシナに併合した。福澤が文明国人は東洋人に対しては全く愛憐の情を示さない例としてあげた「何々の事柄よりして何々国の条約を迫り又地を割くは、其国民に対して無道なり又気の毒なり、理に於て挙行す可らずなどゝの道理談は全く聞ゆることなく」（九巻、一九四ページ）という言葉は、明らかにこの条約締結の状況を指したものである。しかし福澤に安南紛争観を一変させたものは、フランスが安南を征服した事実ではない。以前からその事態を予測して「吾人の痛痒とするに

足らず」と断言していたのだ。彼の認識を変えたのは、フランスの安南や中国に対する行動に示された、西洋列強が東洋諸国を扱う際の、狩人の禽獣に対するような無法無情な態度であるように思われる。福澤がフランスに抱いたこの情容赦なく獲物を殺生する狩人のイメージはより深い真実をとらえていた。ほとんど抵抗のなかったユエの攻防戦の後に、フランス軍は千名以上の降伏した安南の兵士役人を虐殺したのである。この事実はすぐには明らかにならなかった。[3] しかしユエの攻防戦を報道したメイルが、早くからその両軍の死傷者数の異常な不均衡（負傷者二対死者千数百）に不審感を表明していたように、慧眼な人間にはある種の不法行為の存在は明白であった。さらにフランスによる安南征服の予想外の速度も、文明の利器の発達による西欧の脅威の劇的増大を印象づけた。

確かに福澤は以前にも「開国論」（明治一六年三月）などでも日本を「一新西洋国」（八巻、五四八ページ）とするのが志願であると述べて、儒教主義の復活に反対して西欧化の必要を唱えていた。しかし「外交論」における徹底的西欧化の主張には、以前にはみられなかった危機感に満ちた切迫した調子が強く現れている。この調子はこの後しばらくの間、彼の文章に一貫して流れることになる。

この危機感は一〇月二二日の「安南朝鮮地を換へば如何なりし歟」にも強く現れている。冒頭において、世界の交通は蒸気と電信によって大いに発達し世界中に大きな影響を与えたが、東洋人にとって重要なことは「彼文明力を利用する西洋人が東洋を侵略するの一事なり。」（九巻、二二二ページ）と述べてその危機感の原因を示している。この論説で同じ時期にフランスの攻撃を受けた安南と朝鮮において、一方が完全に征服され他方が独立を保っているのは、朝鮮が文明力の及ばない遠方にあったからにすぎない。しかし文明力は東洋の津々浦々にまで普及しつつある、日本も西洋の文明に圧倒されないように勉めなければならない。「朝鮮国が今日迄一方に僻在してその体面を保ち得たる如きの好機会は、再たび我日本の頭上に経過し来らず、世人何ぞ早くこれが覚悟をなさざるや。」（九巻、二二五ページ）と結んでいる。この文章は明らかに日本を安南や朝鮮と同列に置いている。福澤が日本は西洋の侵略を受ける側にあることを自覚していることを示している。「外交論」において「食む」側に加わると宣言はしたものの、彼がこの時心配しているのは「食む」ことではなく「食まれる」ことであった。

この西洋の東洋侵略に対する警戒感は一一月九日の「日耳曼の東洋政略」にも色濃く現れている。この論説は東洋における進出に出遅れたヨーロッパの強国ドイツが、朝鮮の領有を狙っているとの風説を紹介している。強大なドイツがその

気になれば朝鮮の征服は容易であり、他の列強も見返りが得られれば強く反対しないだろうと予測している。当時のビスマルクの海外植民地に対する消極的な態度や、東洋における国際情勢を考えれば、全く根拠のない流言にすぎなかった。しかし福澤はかなりの程度この説を信じ込んでいるように見える。彼の西洋列強の東洋進出に対する危機感の深さを示すものである。ここで注目すべきはドイツの朝鮮征服に乗り出す動機として、フランスの安南占領に対抗するための根拠地の確保を挙げ、又ドイツの朝鮮の征服の方法として、明らかにフランスの安南征服を手本にした、口実を作り上げての軍事的脅迫を想定していることである。そしてドイツの侵略がさらに他の国による征服行動を引き起こすことをも予測している。このことはフランスの安南における行動が前例を示して他の列強の対抗行動を引き起こし、東洋を分割する植民地獲得競争を開始させたと、認識していたことを示している。

この時期の福澤の危機感はほとんどペシミズムの域まで近づいている。元来が本質的にはオプティミストであった彼としては異例なことである。「日本の用終れり」とか「西洋人の日本を疎外するは内外両因あり」というこの時期（一〇月三〇、三一日）の論説も、題名からして悲観的なものである。前者の論説は富裕な大国の中国を文明に目覚めさせる為の、日本の刺激剤としての役割は終わって、日本は西洋にとって用済みとなった、というものである。後者は西洋人は日本に飽きがきて、日本国内の儒教復興などの反動的傾向も相俟って西洋人に日本に対する疎外感を生じさせた、と論じたものである。いずれも日本は西洋から疎外されるようになったとの孤立感を表明したものである。「外交論」における日本は徹底的に西欧化して文明国に仲間入りして「食む」方に加わるとの決意にも関わらず、日本と西洋の間の距離はむしろ拡大したと認識していたのであった。

このような悲観的態度は一一月一六日の「文明進歩の速力は思議すべからず」で一層深まっている。この論説で彼は次のように述べている。西洋文明の二大要素は蒸気と電気であり、この二力の強大な力を利用して西洋は世界中を席巻している。電気蒸気は西洋人の独占物ではないが、西洋人はその使用方法に習熟しているだけでなく、日々にその利用区域を球が坂を下る勢で拡大している。「顧みて東洋人を見れば、文明紀元前の旧夢未だ全く覚めず、僅かに蒸気電気を使用することを学び得て、忽ち疑懼躊躇して其背後を顧み、進むが如く退くが如く、日進月退、車の坂を上るの勢に異ならず、今の有様を以てこれを視るに、東洋西洋の文明の懸隔は日に益甚だしくして、到底相近接するの期なきものゝ如く然り。今にして考れば東洋人にして西洋人と比肩し文明の進路に馳せんとするは、其志の壮なるや嘉すべしと雖ども、実際の大

勢より察するときは時機既に去て追ふべからざるものなりとの感情なきを得ず。」（九巻、二六五―六六ページ）と慨嘆している。ここで東洋人とあるのは実は日本人のことを指しているのは明白である。日本はとても西欧文明諸国に追いつくことが出来ないと告白しているのである。福澤が日本の文明化にこれほど悲観的な意見を表明したことはなかった。この論説の後半では、わずか二年半前には三、四〇年もかかると見られていたフランスの安南の急速な征服を、最近の加速的な文明進歩の例として紹介している。そして「文明の進歩は朝夕を謀るべからず。油断の禍は身を亡ぼし家を亡ぼし又国を亡ぼすべきものと承知せざるべからざるなり。」と結んでいる。フランスによる安南の征服が、日本の安全に対する危機感を募らせた様子が窺える。この論説でもう一つ重要な点は、持説のアジア連帯論の放棄を明確にしたことである。既に日本は文明国に加わって「食む」方を選ぶと、初めて「脱亜」的意見を表明した九月の「外交論」に於いては、この主張は微妙な変化を見せていた。そこでは「西洋の諸強国と比肩並立するのみならず、苟も東方文明の魁とあるからには、近隣の国々をも誘導して、共に天与の幸福を与にするの日ある可し」（九巻、一九八―九九ページ）と述べている。以前は進出してくる西洋と対決するために東洋の盟主となると明言していたのに、「外交論」では西欧の強国と並立すること、東洋の盟主となることは並列に置かれていて、対決色が薄められているのである。この論説「文明進歩の速力は思議すべからず」では次のように論じている。世の中には西洋人の侵略に対抗するために、東洋人が西洋人と将来対決するなどと予想する者がいるが、現代文明の元素たる蒸気電気を駆使する「西洋人の向ふ所天下に敵なく」、「他日東西両洋人種の間に衝突を起こすこともあらんと云ふは、唯己れの力を測らざる東洋人の勝手論のみ。決して道理ある言にあらざるなり。」（九巻、二六五ページ）と断定している。東洋の盟主となって西欧と対決するという以前の自己の主張は、「勝手論」に過ぎないと、ここに完全に否定されるに至ったのである。日本は文明国に追いつくことは出来ないとの絶望感を表明したこの論文で、福澤は東洋は西洋の侵略に絶対に対抗できないという見通しも明らかにした。そのような状況で東洋の盟主などと自称する事は、目に立つ攻撃目標となるに過ぎない、東洋の一員と見られる事さえも避けなければならない。アジア連帯論はこの時点で決定的に放棄されたのである。これ以後の福澤は海外巡幸や、万国博覧会開催を提案して、如何に日本が西洋と同様の文明国であるかを印象づけることに関心を集中させる。

この年の一二月二九日のメイル紙上に、ベトナム侵略を進めるフランス政府の意図が如何なるものであるかを示す注目

すべき記事が掲載された。一〇月三一日フランス議会においてフェリー首相が次のような画期的な演説を行った。彼は「この共和国がその守護者であるところの、偉大な民主主義や、労働者や産業そして商業の将来について考慮することは政府の義務である。」と述べて植民地獲得の必要性を主張、植民地政策に反対する意見を「憎むべき反フランス的態度」と非難、四億の人口を持つ中国の市場としての重要性を強調して、中国南西部に接するベトナムにおける侵略政策において、中国の反発などを心配する必要はない、力を見せつければ彼等は結局言いなりになると断言して次のように結んでいる。「たぶん我々の政策は今日明日の内にトンキン問題を解決には導かないであろう。植民地事業は息の長い仕事である。我々が設立しようと願っている偉大な制度が成果を生むまでには時間をかける必要がある。半世紀前に行われたアフリカに関する議論を思い出すべきだ。当時の政府は我々に流血を強い資材を浪費させたとしてアフリカを放棄すべきだと強く求められた。さて私は諸君に質問したい、我々に流血を強いて、そして我々の軍隊にあれほどの栄光を加えたこのアフリカはわが国の力となり、光栄となり、名誉となり、未来となっているのではないか？（喝采）それ故我々は植民地帝国の建設に取りかかろうとするのだから、忍耐強く沈着に用意を整えよう。我々は自分自身に子供達のために働いているのだと言い聞かせよう。我々は良き父親として未来の世代のために時間の経過と共に価値が増大する一方の投資を行っているのだと考えるべきだ。（大喝采）」

この演説をブリンクリーは次のように評している。これほどに全面的に侵略的な政策がヨーロッパの政府によって打ち出されたことはなく、それがヨーロッパの議会によって承認されたことはなかった。英国の植民地帝国は長年の民間人の商業活動の成果を追認する形で成立したのだが、フランスの場合は全く事情が異なる。フランス政府は公然と侵略と征服の政策を公約した。外国に「偉大な制度を設立」する、そして領土の獲得により後世のために価値ある投資をして、東方の諸国の資源を強制的に収奪する、との意図をあからさまに宣言したのである。

一八八三年末から八四年にかけて清仏戦争は本格化してフランス軍と中国正規軍は初めて衝突した。トンキンにおいてフランス軍は中国の支援を受けていた黒旗軍を打破り、トンキンに入った中国軍もフランス軍の進撃の前に一方的敗走を続けていた。戦況が拡大するのと反比例するように福澤の戦争に対する発言は減少していった。このことは彼がこの紛争を軽く見ていたり関心が低下したことを示すものではない。むしろ軽々しく論じるには余りにも事態を重大視していたためではないかと思われる。この時期の彼の関心は、日本は他

の無力な東洋諸国と異なる存在であること、少なくとも文明化に勉めている侮りがたい存在であることを、西欧に認めさせるように努めることに向けられていた。

一八八四年の二月二日から四回にわたって連載された論説「海外御巡幸」の冒頭において、開国以来日本の西洋文明の摂取による「日本国近代の文明」は「今日にては西洋諸国と左迄大懸隔なき者の如し」(九巻、三七七ページ)と評している。そしてこの急速な進歩の原因の第一は外国交際であると述べ、今後の日本の文明の進歩も外国交際によるべきであると主張している。その外交においても特筆大書すべき大事件は明治四年の遣欧米使節であった。国内的には社会の一般の文明開化を進めるのに貢献し、対外的には世界における日本の評価を高めた一大美挙であったと高く評価している。その後日本も進歩したが西洋に比べればまだ遅れている、そこで日本の文明をさらに進ませ日本の国権を世界に張るために、今度は天皇が欧米に多くの随員を引き連れて巡幸することを提案している。そして新鋭軍艦数隻による巡幸の規模や、旅程についての具体的な計画案を提示している。かれは天皇巡幸によって国民一般に自国の文明の幼稚さを自覚させ文明を進める効果を期待していたのである。さらに「陛下の叡聞聖見を広め奉らんとするには万々之あらず」(九巻、三八二ページ)とは述べているが、明治四年の岩倉使節団の参加者が殆ど開明派になったように、儒教主義の側近に囲まれた天皇への教育効果も密かに期待していたことも有り得る。しかしこの計画の最大の目的が日本を侮れない文明国として西欧諸国に印象づけることにあったことは、次のような言葉からも知ることが出来る。随員には十分に吟味して優秀な人物を選ぶべきである。なぜなら「随駕の士人は自家の智見を啓くと同時に、欧米各国の人民をして我が士人の品格如何を知らしめ、其果して侮る可らざるの感念を興さしむる」(九巻、三八一ページ)からである。御召の艦隊は新規購入してでも最新鋭の軍艦を使うべきである、「一艦隊全面の壮大にして百事斉然たる其有様を、欧米諸国の人に示して日本海軍の軽重如何を知らしむる」(九巻、三八三ページ)ことになるからである。しかし何と言っても巡幸の最大の効果は天皇自身の果たす役割にある。文明国の帝王は互いに交際しておりそれが国際親善に果たす役割は大きい、と指摘して次のように述べている。(九巻、三八八ページ)

「東洋の諸国は古来蟄居の主義に閉ぢられて交際の法を重んぜざるの習慣なるに、独り大日本国の皇帝陛下は其陋習を破て親しく海外に遊び給ふと云はゞ、是迄西洋に知られざる日本国の名声も一時に欧米人の知る所となり(中略)是迄は欧米二、三の学者のみが模糊の間に僅々日本の事を知りたるに聖駕

一たび欧米の都会を過ぎ給ひてより、人民一般始めて日本の日本たる所以を弁知し、夫よりして貿易に国権に其他に推及する所、顧ふに如何ぞや。即ち海外御巡幸の一挙、玉体を煩はし奉るは真実に恐多き次第なれども、我日本　天皇の威光を西洋各国に輝かすの好機会は他に求む可からざるものと信ず」

これは文明化した日本のイメージを海外に流布するための、一種の壮大な広報宣伝活動とも言うべきものである。グラント元米国大統領の世界漫遊旅行や、ハワイ王の来日にヒントを得たものと思われる。確かに当時としては意表をつく提案ではあるが、福澤が時々発する無責任な思いつきの類ではない。この文章から感じられる彼の並々ならぬ熱意と真剣さは、危機感に裏打ちされたものである。

福澤は西欧における日本のイメージがどの程度のものであるかを客観的に認識していた。三月五日の「日本は支那の為に蔽はれざるを期すべし」において、日本自身は維新以来の進歩を誇り東洋第一の文明国と自惚れて中国を見下しているが、西欧においては国土も大きく物産も豊かな中国の事情がよく知られているのに比べ、日本はその存在さえ殆ど知られていない、と述べている。西欧人にとっては中国は東洋の同義語といえるほどに大きな存在なのに対して、日本は西欧において文明国の一員として見られているどころか、大陸中国の「属島」ほどにしか見られていないのが現実なのである、としている。

四月二五、二六日の論説「日本東京万国大博覧会」は、この様な西欧における日本に対する無知を改善しようとする一つの試みの案である。ここで彼は次のように論じている。欧米では日本が一文明国であることを知るものは少ないし、国の存在さえ知らないものも多い。そのために治外法権などという有害至極の制度が今日に至るまで残存しているのである。居留地の金目当ての商売人の外国人に、日本についての正しい知識の普及役を期待するのは無理である。むしろ無心の外国からの紳士階級の漫遊客の方に、日本についての公平な観察を期待出来る。日本人は欧米人が同等視してくれないと、その無知や無関心を嘆いたり恨んだりしている。しかし欧米が理解してくれる時を待つだけではいけない、日本が自ら知られるように努力をすべきである。日本に対する欧米の与論を転換する一つの手段として、東京で明治二〇年頃に万国博覧会を開いて大いに欧米の観光客を招き、日本中を見物させ日本が文明国であることを宣伝すべきである、と提案している。

この論説が二月の「海外御巡幸」と同一線上にある提案である事は明白である。会場や諸経費などについての詳しい具体的な計画案を提示しており、巡幸論と同様に真剣な意欲が

感じられる文章である。巡幸論の場合は日本から出かけるのに対して、博覧会の場合は欧米から来てもらって、日本が文明国であることを認識してもらおうとの試みである。松方財政下における不況の最も深刻なこの時期に、巨額な出費[4]を伴う大規模な事業を一度ならず二度も提案したことを、単なる思いつきとして片付けることは出来ない。福澤も、今は「民力も疲弊して重々負担の折柄」（九巻、三八六ページ）であることは十分承知しているが、民力休養よりも「国の文明と国権とに関する」海外巡幸を優先すべきだと主張している。万国博覧会についても「世界に普通なる射利の為めにもあらず又工芸奨励の為めにもあらず、唯我が日本国を現在のまゝに欧米国人に示して無私公平の説を得んとする」（九巻、四七八ページ）のが目的であると述べている。西欧における文明国としての日本というイメージをなんとかして定着させなければならない、との福澤の切迫した心情を示すものである。

海外巡幸や万国博覧会は規模こそ大きいがその性質は、当時日本で開催されていた鹿鳴館の舞踏会と通じるものがあり、表面的粉飾という感は否めなかった。より本質的な変化が必要であると認識せざるを得ない段階が到達する。五月一九日から四回に渡って掲載された「開鎖論」は福澤の世界情勢に対する危機感が一段と深まったことを示している。「難い哉、一国の独立を維持するや。」（九巻、四八九ページ）という嘆声の様な言葉でこの論説は始まる。厳しい競技場とも言うべき文明世界で日本の独立を維持するために二策を得たが、自分の思慮では及ばないので「大方の教を乞はんとす」（九巻、四九〇ページ）とかれは言う。その一は鎖国政策である。幕末の時のような攘夷主義的なものではないが、日本人と外人の区別を明確にして西洋文明の利点は採るが社会の根本は日本流にする、戦争は望まないが外国との戦争を覚悟して全国の防備を固める、外交面でも対立は求めないが条約改正などにおいて自国の利益については一切譲らない。困難な政策であるが国民が決心すれば可能であるとしている。第二の策は開国政策である、西欧全体からみれば日本は遅れているが、個々の人間の資質では決して劣っていない、それを信じて退くよりも進んで競争に参加すべきである。即ち「大に国を開て文明の国人に交り、啻に政治上の条約を以て政府と政府との間に親睦を保存するのみならず、双方の人民相互に近接して遂にはその風俗習慣をも同一様にするの方略を運す可きなり。」（九巻、四九五ページ）この様に開国策とは国中を外国人に開放して西洋化を徹底することである。この一見積極的な政策の底にあるのは、西欧と同一化することによって身を守ろうとする防御的姿勢である。何故ならこの政策の必要性をかれは次のように説いているからである。西洋諸国同士の場合にはたとえ事故が生じても「同類同情、穏便に局を結ぶ

もの」が多いが、「畢竟西洋全体は一類にして類外の者に向ては同一様の情を見ず」で、インドやその他の地方においては「威勢を逞うして哀惜する所なく、理非を別たず他を殲滅」するのが西洋のやり方だと紹介している。しかし福澤にとってもこの様な急激な開国策は決して本意ではなかった。彼はむしろ長い年月をかけての漸進的な内地開放策を是として、「数年以前までは頻りに其辺の方案を講じ」（九巻、四九九ページ）ていた。しかし世界の文明の長足の進歩は彼の意表に出て、ついに彼は「世界の大勢に屈し」て急進論に転換したと告白している。そして最後の第四編において「世界の時勢は日に益切迫して毫も猶予を許さず。」（九巻、五〇〇ページ）として、上の二策を検討して速やかに実行することを求めている。そして開国策の補足として英語を全国に奨励することを提案している。それは単に学校での教育にとどまるものでなく「店頭の書記少年に至るまでも」対象に考えているほど徹底したものである。それは「国と国との間に於ても、語を同うするが為に平時の交際を滑にするのみならず、或は戦争の乱に際しても、双方の人民、言語を共にする者は、惨状少なしとの事は、歴史家の知る所なり」（九巻、五〇一ページ）という危機感に支えられたものであった。

この論説における開国論は前年九月の「外交論」とよく似ている。いずれも西洋人の異文化の人間に対する無情な取扱いを理由として、風俗習慣に至るまでの徹底的な西洋化の必要を説いているのである。しかしながら「外交論」における「食む」方の文明国に加わるというような能動的姿勢はもはやない。「世界の時勢は日に益切迫して毫も猶予を許さず。」という情勢認識から、選択を迫られている徹底的に受動的姿勢である。「外交論」における西欧化論が一般論にすぎなかったのに対して、ここでは即時の全面的内地開放や英語教育の奨励などの具体的方策を提示して、事態の緊迫化を物語っている。この開国論に対置された鎖国論は準戦時体制とも言うべきものである。彼はそれほどに事態を深刻にとらえていた。しかも福澤は二つの選択の間で本気で迷っているように見える。彼が鎖国論よりは開国論に傾いていることは明白である。しかしながらその全面的内地開放は決して彼の本意ではない。世界の大勢に「屈して」転向したもので、まだその結果に確信を持てないでいることは明らかである。二策の選択について「教を乞はんとす」という言葉は単なるレトリックではない。このような一種の逡巡しているような調子は福澤の文には希である。「外交論」におけるものよりも一段と危機感が深まり、一刻の猶予も許されないというような切迫感が加わっていることは明白である。この苦渋に満ちた調子や深刻な切迫感は、この直後の論説の「条約改正論」と「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」まで続くことになる。これら

の論説は一連のものとして扱うことが出来ると思う。

この「開鎖論」にすぐ引き続いて五月二三日から六回に渡って「条約改正論」が掲載された。その内容は現在の欧米との条約が不公正極まりないものであることを強く主張、特に治外法権の弊害の大きさについて詳しく論証して、一刻も早い条約改正の必要を訴えたものである。この文章で特徴的なものは「日本国の存立と治外法権は決して両立すべからざる」(九巻、五一七ページ)とまで断言している危機感の深さと、「条約改正を決行するの必要は近時愈益切迫の勢に移り」(九巻、五〇四ページ)とするこの時期に特有の切迫感の強さと、治外法権に対する「人間世界にあるまじき事柄なり。」(九巻、五一〇ページ)という言葉にも見られるような、常にも増して激しい攻撃である。この六編の「条約改正論」の半分の三編を治外法権問題に当ててその不当性を批判している。福澤がこの論説でこれほど強く治外法権の廃止を訴えたのは、この直前の論説「開鎖論」において全面的内地開放論を主張した事と大きな関係がある。治外法権が如何に不公正なものであろうとも、外国人が狭い居留地に閉じこめられている限りは、その害の及ぶ範囲もごく限られたものに過ぎない。しかし治外法権を廃止せずに全面的内地開放を実施すれば、その害を全国的に広げる事になり、日本としては到底受け入れられない事態となる。治外法権こそが全面的内地開放の大きな障害なのである。それ故にこの時期には徹底的に内地開放して、西欧化する事が日本の独立維持に必要であると考えていた福澤が、これほど激しい調子で治外法権の廃止を求めたのである。彼は治外法権廃止に抵抗する外国人に次のように訴えている。(九巻、五一八ページ)

「今我日本在留の欧米国人等は、何の理由ありて斯る有害不条理の治外法権を保続し、為めに日本は損残するとも法権の実行は六ヶ敷とも毫もこれを顧みるに足らず、兎に角に従前の変例を正して日本住民たるの正当の地位に立戻ることは不同意なりと抗論せんとするにや。其意蓋し日本人は欧米人に比して劣等の人種なり、故にこれと同等の地位に立つを厭ふと云ふに在らんか。然らば則ち我輩日本人は君等欧米人に承はらん、我輩日本人に何等の不都合ありて君等欧米人に比して劣等なりと証明することを得るや。」

欧米人の日本人への人種偏見に抗議する上記の文を含む「外国人は何故に治外法権の撤去を恐るゝや」の一編には通常の福澤の文章に見られる余裕が感じられず、心底からの感情をそのままに吐露しているような一種悲痛な調子が漲っている。福澤のこの時期における、一刻の猶予もないというような、危機感を反映したものと思われる。

その様な福澤の危機感が頂点に達したのが、六月六日の論説「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」である。明治八年の『文明論の概略』や明治一四年の『時事小言』以来一貫して固持してきたキリスト教に対する反対論[5]の立場を一変して、日本がキリスト教を採用すべきことを主張するに至ったのである。しかし、この転向は宗教的な改心などとは何の関係もなくて、国際関係に対する危機感によるものである。この論説が、周囲のものと同一化することによって他の襲撃と排斥を免れる、動物の保護色の説明によって始められているように、西欧文明の全盛の時代に異質な日本が排斥され攻撃されることに対する恐れが、この大転換をもたらしたのである。福澤にとっても持説を曲げ西欧諸国に媚びるようなこの変節は、不本意なものであったことは明白である。しかしながら明らかに清仏戦争から得た「畢竟万国公法の東洋諸国に及ばざるが如きも亦、其外道国たるを以ての故ならんのみ。」(九巻、五三一ページ)との観察と、「文明国間に独立するものと覚悟する以上は、文明の色相に蔽はれて其国を保護するの外なかる可し。」(九巻、五三二ページ)との諦念にも似た認識と、そして最近の西欧列強の侵略的傾向に対する危機感が、福澤をして従来からのキリスト教排斥論から容認論に百八十度転換させるに至ったのである。

この論説にも「開鎖論」以来の苦渋に満ちた逡巡しているような調子が顕著である。「此外別に策なきが如し」、「外なかる可し」、とか「従はざるを得ず」などの歯切れの悪い言葉は、意に満たない決断を強いられた福澤の内面の苦悩をよく現している。しかしながらこの論説には、今までの持説とは正反対のキリスト教容認論を敢えて打ち出すことによって、「開鎖論」以来の自己の逡巡に決着をつけたという趣がある。それだけではない、昨年の九月の「外交論」以来危機感に迫られた福澤が追求し続けてきた、如何にして西欧に日本を文明国として認めさせるかという問題についても、キリスト教の採用という解答を提出することによって最終的な決着をつけたと思えるのである。「外交論」の末尾において日本が文明国の列に加わるために「政事法律学問教育の根本より商工殖産の業に至るまで、一切万事」(九巻、二〇三ページ)を、西洋風に従うべきであると主張していたが、社会の根本要素の一つの宗教については慎重に言及を避けていた。しかしながら福澤の事態に対する危機感はその最後の留保さえも、捨てなければならないと観念させるに至った。この論説の「宗教も亦西洋風に……」という題名は、直接にこの「外交論」の一節を受けてそこに欠けていた要素を提出すると同時に、その時以来の福澤の内面的葛藤に最終的に終止符を打ったものと思えるのである。「外交論」以来の彼の文章に一貫して流れていた、焦りにも似た危機感に満ちた一種の切迫した調

子は、この論説以来姿を消してしまったのである。この論文における次の文章は彼自身の態度変化を示している様に思われる、「容るゝが如く拒むが如く逡巡躊躇してこれを看過せんよりは、一刀兩断、断然之を容るゝに一決するの愈れるに若かざる可し。」(九巻、五三五ページ)。

この論説は単に福澤のキリスト教容認論としてだけでなく、前年の八三年九月の末以来続いていた危機感に満ちた精神状態からの転換点としても重要である。そのことを劇的に示すのはこの論説を間にはさんで、一カ月も隔てずに発表された二つの条約改正についての論説である。一つは五月二三日から二九日に掲載された前述の「条約改正論」であり、他は六月一一日から一七日に掲載された「通俗外交論」である。前にも紹介したように「条約改正論」においては、現条約を不公正極まりないものであると非難、特に治外法権を「弊害百端、実に名状すべからず」(九巻、五一一ページ)の不正であると主張、治外法権と国の存立は両立しないとまでも極言して、その廃止を求めている。この時期の福澤に特有の切迫感に満ちた調子に溢れており、彼には珍しく激しい感情が表面に出ている文章である。一方の「通俗外交論」は全く調子が異なっている。同じように不平等条約の弊害を述べてその改正を求めているのだが、福澤の文章は通常の余裕のある調子に戻っており、この問題を理性的に論じている。治外法権が日本に導入された歴史的由来を紹介して、外人の身になれば「止むを得ざるの事情」(五巻、四二九ページ)があったと理解さえ示している。治外法権のもたらす様々な弊害を解説しているが、その最大のものでさえ奸商の存在にすぎない。「治外法権を廃するにあらざれば、奸商の跡を絶つ可からず」(五巻、四三九ページ)という言葉と、「条約改正論」における「日本国を立てんか、治外法権を廃せざる可からず」(九巻、五一七ページ)という激語の対照は、この二つの論説の相違を象徴するものである。「条約改正論」では条約改正のために日本人に対して、明治維新や西南戦争におけるような犠牲を要求している。これに対して「通俗外交論」では治外法権を廃止するためには、外人を非難するだけではなく、日本人の側においても外人との交際を親密にするように努めるべきであると述べているに過ぎない。

同じ主題について論じた、この二つの文章の調子には非常な違いがある。「通俗外交論」は福澤の他の条約改正関係の文章と並べても違和感はない。異常なのは「条約改正論」であり、この時期の福澤の文章なのである。福澤が明治一六年の九月の「外交論」から、一七年六月の「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」に至るまでの時期に、危機感に迫られた異常な精神状態にあったことを示すものである。そのことを福澤自身も自覚していて、「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」

によって正常な精神状態に復帰した直後の文章を、「通俗」という冠をかぶせた同じ「外交論」という題名の論文で始めたという推測も成り立ち得る。

それでは最終的にはキリスト教容認論にまで行き着いた「開鎖論」以来の、福澤の五月末から六月初めまでの、対外的危機感の異常な昂進は何が原因であったのだろうか。彼は直接にその原因について何も言及していない。「開鎖論」における準戦時体制のような鎖国論や、「戦争の乱」（九巻、五〇一ページ）への懸念から生まれた極端な西欧化を伴う開国論は、日本の独立に深刻な危機感を抱かせるような非常事態の発生を予測させる。それは清仏戦争において、中国の一方的敗北が明白になったことであった。この時期のメイルにおける清仏戦争の記事は、大きな手がかりを与えてくれる。メイルは四月二六日の紙面において次のように報じている。トンキン地方における戦闘が殆ど完了した、勝敗の結果は疑問の余地のないほど明白で、フランスの勝利者としての地位は揺るぎないものである。中国はトンキンに対する全ての発言権を失いその無力さを露呈した。このようにベトナム北部の中国国境地帯のトンキンをめぐるフランスと中国の戦争において、中国が惨めに完敗したことを伝えている。五月一〇日にブリンクリーは、今回の戦争で中国を完全に打ち破った、フランスの国内の政治的雰囲気について次の様に紹介している。「中世の時代以降に侵略的勢力拡張政策が、今のフランスによる程公然と唱えられたことは他のヨーロッパの強国にはなかった。最も見識のあるフランスの思想家達[6]はこの傾向を抑えるどころか奨励している。（中略）誰もがよその国を食い物にして太っているのだから、フランス人は自分達も同じようにするのが当然で正しいことであると感じている。彼等にはそのことを公言する勇気がある。彼等は自分達の計画を少しも隠さない。公衆の意志、或いは少なくとも教育ある階級の意志はフランスの植民地を拡大する全ての試みを支持している。」さらに彼は、フランス人が植民地政策においては、ロシアの中央アジアにおけるやり方を手本にすることを公言していることを紹介して、「すなわちそれは無限の膨張政策であるべきだということである」と評している。五月一七日にはフランスと中国の間に平和条約が結ばれたことを報じてその内容を紹介して、全面的な降伏であり中国にとっての僅かな救いは賠償金を免れたことだけであると評している。そして「脅迫的態度に出ては尻尾を巻いて引き下がるという今回の中国の戦い方の記憶は、フランスが最近になって強く示すようになった侵略的傾向を、抑制する方向には働かないであろう。」と述べている。「歴史上にこれほど屈辱的な目にあった国は存在しない。北京の政府はこれでしばらくの間の平和を確保したとの慰めさえ与えられない。それどころか、中

国は永続的な困難の時代に突入したことは明白なのである。中国は自衛の能力に全く欠けることを露呈してしまった、程無く中国は世界にその事実が広まってしまったことの意味を知ることになるだろう。」と予言している。翌週の五月二四日の論説でブリンクリーは、今回のフランスの行動が東洋にもたらした影響について次のように述べている。「東洋人の観察者たちは三つの巨大な影が音もなく着実にキリスト教世界に含まれない全ての大陸を覆いつつあることに気づいているはずだ、英国の影、ロシアの影、そしてフランスの影である。日本と中国に関してはこれまでは実体の無い影に過ぎなかった、しかし今ではそうも言えなくなった。フランスは今や中国の門口にいる」。

すなわちこの時期にメイルは清仏戦争の記事において、中国がこれ以上はないというほどの屈辱的な敗北を喫した事実[7]を報じ、フランスにおいては国民は侵略政策を圧倒的に支持しており、その侵略熱は益々その高まりを見せているとの観察を示し、今回の中国の敗北はその弱体を露呈して、東洋において他の列強の侵略を誘発することを予想していた。西欧における日本のイメージについて異常なほどに気を遣っていたこの時期の福澤にとって、西洋の強国の前に無力をさらけ出した弱体な中国のイメージは、たとえ潜在的敵国の中国のものであっても、危機感を強めるものであったろう。なぜなら「日本は支那の為に蔽はれざるを期すべし」で彼も認めていたように、大国の中国は西欧人の心の中にあっては、殆ど東洋と同義語であるような圧倒的に大きな地位を占めており、中国の「属島」ほどにしか認識されていない日本のイメージも、それに左右されざるを得ないからである。一方福澤が常に注目していたこの時の西欧の政治情勢はどのようなものであったろうか。中国を打ち破ったフランスにおいては、征服熱が大衆を駆り立てていて彼等はあらゆる侵略計画を支持して、無限的膨張政策を主張していた。このような侵略的傾向は伝染性[8]が強いものであり、他の列強も対抗的行動に出るのは必至であった。ブリンクリーも、フランスが手本としているロシアやフランスが嫉妬を感じている英国も、やがては植民地獲得競争に巻き込まれるだろうと予測していた。

一方には完全な無力さを露呈した中国のいる東洋があり、他方には征服熱に冒され文明の利器を駆使して獲物を競い合う列強諸国のいる西欧がある。やがて東洋において領土獲得競争が開始されることは必然である、その時に当たって西欧諸国は異教徒である東洋人に対しては同情も道義心も示すことなく、互いに争いつつ東洋を蹂躙することになるだろう。以上のようなものと推測される「開鎖論」を書いた当時の福澤の世界情勢のイメージは、「外交論」における状況認識とほぼ同一である。しかしながら「外交論」において福澤に衝

撃を与えたフランスの正義も人道も無視した侵略政策は、民衆の圧倒的な支持を受けそれが益々推進される勢いを示していた。そしてそれが他の列強にも広まることが予想されるに至ったのである。しかも「外交論」当時の西欧の獲物が遠方の小国の安南に過ぎなかったのに対して、今回は隣の大国で日本と共に東洋の数少ない独立国の中国である。福澤は孤立感を深め危機感を一層募らせたと思われる。無力で弱体な東洋の一国と見られることを避け、西洋の文明国の同類であると認めさせねばならないという当時の福澤の課題に緊急性が増した。海外巡幸や万国博覧会のような迂遠な手段では間に合わない。単に社会全体の西洋化を漠然と説いただけでは不十分である。そこで彼自身もまだ確信が持てなかった即時の全面的内地開放による、西欧化の徹底を説いたのである。しかしこのような思い切った手段も彼の危機感を解消しなかった。そこで彼はついに長年の持説を翻してキリスト教容認論を説くに至ったのである。ブリンクリーも、英国とロシアとフランスの「三つの巨大な影が音もなく着実にキリスト教世界に含まれない全ての大陸を覆いつつある」と述べて、列強の世界征服がキリスト教国の異教徒の支配の形をとっていることを指摘していた。福澤もその事実を直視してそれに適応することを決意したのであろう。キリスト教を容認することによって、福澤の西洋化論の立場は完璧なものになった。少なくとも内面においては、彼は西欧の価値基準を全て受け入れることに決定したのである。彼の心の中の「脱亜」はこの時完成したものと思われる。彼は一つの立場を選択して、日本の位置づけに関する模索に終止符を打ったのである。「外交論」以来彼の文章に現れていた、危機感に満ちた苦渋の色や逡巡の影は消失した。これ以後の彼の国際情勢を論じる文章からは、西欧の侵略におびえる東洋の視点は姿を消した。

キリスト教容認論を発表して平常心を取り戻してからの福澤は、清仏戦争について数多く発言するようになった。「外交論」以降の前年の一〇月から六月までの危機感と混迷の時期において、清仏戦争についての論説が「仏国は支那の恩人なり」と「日本は支那の為に蔽はれざるを期すべし」の二本だけであったことと対照的である。この戦争を客観的に論じる余裕を失わせるほどに、対外的危機意識が強かったと見るべきであろう。

七月七日の論説「支那政府の失敗支那人民の幸福」と、これに続く一〇日の「西洋人と支那人の射利の勝敗如何」では、今回のフランスの勝利で通商に開かれることになった中国南西三省における中国人民の運命や、中国人とフランス人の通商上の競争について予測している。そして八月一一日の「仏国戦を台湾に開く」では、フランスが中国との賠償金交渉の不調を理由に戦端を開き台湾のキールンを攻撃占領した事実

を報じている。フランスの台湾占領には懸念を表明しているが、特に強い危機感は示していない。さらに一五日の「脈既に上れり」では、中国は阿片戦争以来西欧の武力に痛い目に合いながら、当時の西欧が貿易を重視して征服の意図が少なかったので油断をして備えをしなかった。ところが最近西欧は再び侵略欲を現し始めた、今回のフランスに続いて列強も狙っているので中国の滅亡は近いと結論している。ここで注目すべきは、以前は「欧州外の地に向ては平和と貿易とを維持拡張するの政略を主張し」（一〇巻、一八ページ）ていた西欧において、「欧州人の挙動近来頓に変化を現はし、再び東洋に向て武を燿かし国を奪ふの欲念を発し、これを実際に急施せんとするの情、欝勃、其胸郭に塞りて制止すべからざるが如く然り。」（一〇巻一九ページ）と指摘して、西欧内部における最近の自由貿易主義から帝国主義への風潮の変化を明瞭に認識していたことを示していることである。

翌月の九月四日の「輔車唇歯の古諺恃むに足らず」は、福澤の変身ぶりを示す重要な論説である。この文章で彼は、中国の敗北は自業自得であり、隣国だからと言っても、「恐るゝ所も唯西洋諸国なるのみ、交るべきも又唯西洋諸国なり」（一〇巻、三二ページ）と決心した日本が、心配する必要はないと断言している。憂えるのは「西洋各国が誤て我日本国を尋常東洋の一列国なりと認」め、中国と同様に組みし易いと見られることである。日本は「東洋諸国中、友として親しむ可く敵として憚る可きものは独り日本国あるのみ」（一〇巻三三ページ）という事実を西洋人に知らせることが必要であると結んでいる。この論説では西欧の強国による中国の征服という、以前には非常に恐れていた事態について取り上げているが、自業自得であると冷たく突き放している。日本が他の東洋諸国と同一視されるという懸念についても、以前にはあれほど心配していたのに今は本気で心配している様子は見られない。日本は既に西欧と運命を共にする決意をしたのだから、中国の運命は日本に関係せず、日本が東洋の弱小国と見誤られる恐れは少ないという、福澤の心の中の「脱亜」の確立を示すものである。

この時以降清国の滅亡を予想する文章が多くなった。九月八日の「清朝の秦檜胡澹庵」では、フランスとの戦争の結末がどうあれ清朝の命脈はつきたと断じている。そして九月二四、二五日の論説「支那を滅ぼして欧州平なり」において福澤は、最近の西欧の侵略熱の再燃の背景を分析して、その社会内部における貧富の差の拡大などの危機の存在を指摘している。そして社会の不満を外に逸らすために西欧が中国を侵略して、分割占領にいたる可能性は大きいと観測している。西欧の東洋侵略について論じているが、それに対する数カ月前のような危機感は殆ど見られない。

日本が心配すべきことは中国と混同されることを防ぐことだけである。二七日の「支那風擯斥すべし」では、日本は西欧文明との接触が短いにも関わらずその長所を認めその摂取に努めている、ところが接触が長い中国は何も学ばないし今後も中国人が文明に目覚める望みはないと論じて、「人民開化せざれば之を敵とするも恐るゝに足らず、之を友とするも精神上に利する所なし」（一〇巻、五一ページ）として、「同流混淆の災を防」ぐ為に中国との交際は商売だけにとどめ知識の交流さえも絶って、一切の中国の文物を排斥することを主張している。持論の日本の徹底的西欧化と裏腹の関係にある、真の意味での「脱亜」論といえるものである。

このような「脱亜」的傾向をさらに一層展開させたものが、一〇月一五、一六日の論説「東洋の波蘭」である。これは九月二四日の「支那を滅ぼして欧州平なり」で言及した西欧による中国の分割の可能性を具体的な想像図として示したものである。この冒頭で今回の清仏戦争は尋常の一紛争ではない、「欧州文明の各国が漸く亜細亜を侵さんとするの際、仏蘭西が偶々其漸侵の端を開きたることなれば、其大勢の実は欧亜交争の入手なりと云ふ可し。」（一〇巻、七二ページ）とも、「今回の仏清事件は黄白両人種の交争なりと云ふも可ならん。」とも述べて、清仏戦争が持つ世界史的意義の重要性を指摘している。そしていくつかの国が集まれば一国では到底出来ないような悪事を行うことが出来る例として、一八世紀のロシアとドイツとオーストリアによるポーランドの分割を紹介している。そして外国の友人の提供による支那帝国の未来記であると称して、一八九九年における西欧列強による中国の分割の想像記を地図も付して紹介している。これは全く空想上の産物ではあるが、決して非現実的なものではなくこの様な事態に備えておくべきだと説いている。

ここに注目すべきは、この未来の中国の分割に日本もフランスや英国と共に占領国として参加していることである。前年九月の「外交論」において日本は狩られる東洋ではなく狩る西洋に加わるべきだと論じて、「脱亜」的主張を初めて明らかにした。しかしそれ以後の福澤の主要な関心は、如何にして狩られないようにするかと思案することであった。そしてこの年の六月に持説を翻してキリスト教を容認することによって、西欧の価値観を全面的に採用して、「脱亜」の姿勢を完成させた。この時以来西欧の東洋侵略は憂うべきことではなくなった。そしてこの論説は、ついに日本が侵略国の一員、狩る方の仲間に加わることを福澤が意識し始めたことを示している。それ故に今回の清仏戦争が「欧亜交争の入手」であるとの認識が少しも危機感を募らせずに、中国分割の想像をむしろ楽しんでいるのではないかとの様子さえ窺えるのである。福澤の心の中において「脱亜」観念は一つの頂点に

達した。単に西欧列強から獲物と見なされることを避けるための「脱亜」から、彼等と共に獲物を狩る仲間に加わる「脱亜」の段階への移行がはっきりと予見されるに至った。

このような甘い空想に耽っていた福澤は、現実によって厳しい反撃を受けることになった。この「東洋の波蘭」から僅か二カ月も経たない一二月初めに、福澤も関与していた朝鮮における親日本派のクーデターは失敗して、中国軍のために日本勢力は朝鮮から一掃されてしまったのである。福澤の心中では文明国の西欧の一員に加わっているはずの日本が、彼によって既に脈は上がったと診断され、日本などの分割を待つばかりであるはずの老大国の中国によって、諸国注視の場で打負かされてしまったのである。一二月一五日に「朝鮮事変」でこの甲申事変を最初に報じて以来、翌年の三月一六日の「脱亜論」にいたるまで、福澤は時事新報紙上において殆ど他の主題は取り上げず、この事件のみを論じて憑かれたように中国に対する強硬論を説き続けた。福澤のこの異常な言動に対して、様々な理由が挙げられている。私は傷ついた自尊心の問題が無視できないと思う。心の中における「脱亜」を完了していた福澤の中国への態度は、中国に対する西欧の蔑視感をそのまま見習ったようなものであった。甲申事変で日本は中国に敗れたが、福澤がこれによって中国に対する見方を変えた様子はない。その中国に福澤が特別な関心を持っていた朝鮮において、西欧の同類と自惚れていた日本がしてやられたのである。見下していた人間に負けたことによる傷ついた自尊心というものは、トンキンでのリヴィエール戦死の後のフランスの社会におけるように、病的な好戦的意識を生むことがある。福澤が自ら「怨恨不良にして執念深きが如く」（一〇巻、二一四ページ）と述べた、支那の膺懲を求めて止まない対中国開戦論に同様の病的意識を感じるのである。

「脱亜論」は戦争の見込みがなくなった事が明白になった三月に、一連の甲申事変関係の論説の最後として発表したものである。その内容は西洋文明の東漸は避ける事が出来ない、日本は独立維持のために西洋文明を採用し、その妨げとなる朝鮮支那とは絶縁すべきである、というものである。明治一六年九月の「外交論」から翌年六月のキリスト教容認論にいたる過程で、確立していた脱亜的主張に復帰したのである。すなわち、彼が前年の一二月以来続けていた戦争キャンペーンを終わらせ、朝鮮に対する関与の断念を告げるものなのである。この文章は自分の開戦論が敗れた失望の中で書かれたものなので、「（支那朝鮮は）西洋人が之に接するの風に従て処分す可きのみ」という侵略的な響きのする言葉はあるが、全体としては沈んだ調子であり、これを福澤の東洋侵略論と解釈するのは疑問である。末尾の「我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」という言葉の示すように、中

国と朝鮮に対する絶縁宣言と素直にとらえるべきである。

(1) リヴィエール戦死がフランスの安南侵略の転機となることを福澤は鋭く見抜いていた。門下生に対する書簡の中で、アンリ・リヴィエール大佐が、「支那の賊兵の為に斃され候儀に付、仏蘭西にても黙する訳には参る間布」(「村井保固宛書簡」、明治一六年六月一九日)、と福澤は予測している。彼は「フランスの干渉の当初から、この地域における状況の進展を明敏に観察した」(シン・ビン前掲書)だけではなく、フランス本国などの西欧における政治情勢の動向についても、大きな関心をもって注目していたのである。海外の事情に対する関心の必要をいつも説いていた福澤の、国際問題に関する洞察力は同時代の日本人の間では群を抜いていたと思われる。これに匹敵するのは、ブリンクリーがその国際情勢における観察力を絶賛していた、伊藤博文であると思われる。伊藤もこの時期に、西欧の脅威を前にしての、日本の独立への深刻な危機感を表明していた。(坂野潤治『明治・思想の実像』)

(2) 初瀬龍平氏も前掲書で「「脱亜論」と同じ趣旨の発言は、それ以前にも散見される」として、「外交論」を例として挙げている。シン・ビン氏も「「脱亜論」の先駆となった「外交論」と形容して、フランスのユエ攻略の衝撃から生まれた「外交論」が脱亜的主張の最初のものであることを指摘している。

(3) ユエの虐殺事件が公になったのは、日本にも関係の深い作家でもある海軍士官のピエール・ロティがフィガロ紙上に暴露したからであった。フランスの侵略政策に批判的で、フランスの現地における国際法や人道を無視した行動を非難していたブリンクリーは、早速メイル紙上で取り上げ(一二月二二日)強く批判した。しかしながら、福澤諭吉が西欧諸国はお互いの東洋における不法行為には目をつぶると述べたように、このような批判は例外的で、フランスの行動には影響を与えなかった。

(4) 福澤は海外巡幸の経費に五百万円を、万国博覧会には一千万円の予算で入場料などの収入があるとしても最終的には五百万円ほどの欠損を見込んでいる。国家予算が六、七千万円ほどの時代である。

(5) 明治八年の『文明論之概略』では、キリスト教は日本のおかれている厳しい現実には「宗教は広大なるに過ぎ、善美なるに過ぎ、高遠なるに過ぎ、公平なるに過ぎ」る、と反対している。明治一四年の『時事小言』に至っては、キリスト教は西洋人へのいたずらな親近感を育て、「国権維持の為に大なる障害と云ふ可し」とまで言って、その排斥を主張していたのである。

(6) そのような思想家達の最も優れた一人がポール・ルロワ・ボーリュー(1843-1916 著名な自由主義経済学者)であった。彼はその著書『近代諸国民の植民について』において、植民地はフランスの繁栄のために不可欠であると主張している。このような帝国主義を鼓吹する彼の著書は帝国主義政策を開始したフェリー首相などにも大きな影響を与えた。(参考、ブリュン シュヴィック「フランス新帝国の起源」『帝国主義と植民地主義』(お茶の水書房)昭和五八)。エコノミスト・フランセーズ誌の編集長であった、ルロワ・ボーリューを、優れた自由主義の経済学者として高く評価していたブリンクリーは、メイル紙上に度々その文章を引用していた。しかし、安南紛争以後は代表的な帝国主義者として、

彼の言論を紹介していくことになる。

(7) 正式には宣戦布告のなされることのなかった、清仏戦争の正確な戦争状態の期限を特定することはむずかしい。一般的には、この八四年五月の李鴻章とフルニエの協定に対する解釈の違いから、六月にランソンで起こった武力衝突によって再燃した、台湾攻撃や福州砲撃などをともなった戦闘行動を本格的な清仏戦争としている。しかし最終的和平条件となった一八八五年の天津条約は、安南に対する宗主権の放棄など中国の敗北を認めた、李・フルニエ協定を基礎としたもので、ランソン以後の戦闘は「無用の流血」(坂野正高『近代中国政治外交史』(東京大学出版会) 昭和四八)に過ぎなかった。シン・ビン氏も、一八八四年五月のフランスと清の条約によって、「清はベトナムがフランス保護領であることを承認し、その軍隊をトンキンから撤収することに同意した。」その後に戦闘が再開されたが、「この条約によって、フランスのベトナム干渉は完了したとみなすことができよう。」と述べて、フランスの勝利が八四年五月の時点で事実上確定したことを認めている。

(8) 「新帝国主義」という論文で、ホブソンとレーニン以来の帝国主義のテーゼに対する修正論を提出した、フィールドハウスは、一九世紀末の世界的植民地獲得競争が、「政治的緊張の下で世界の分割から取り残されてしまいはせぬかという恐怖」が、「あらゆる現実的な考慮をおさえて」しまい歯止めのきかないものとなってしまった、と指摘している。そして、この政治的影響力の伝染性の強さを示すものとして、通商面で現状維持が有利で外国の土地に対して現実的な価値評価の伝統が強かったイギリスまでも が最後には引き込まれた、事実を挙げている。(『帝国主義と植民地主義』)

二 「脱亜論」と脱亜的転換

福澤諭吉の対外論に関する研究において「脱亜論」は、アジア連帯論から西欧へ追随してアジア侵略への転換を表明した文章として非常に重視され、数多くの論文が書かれてきた。しかし私はその傾向に大きな疑問がある。前の章で詳しく検討してきたように「脱亜論」は決して彼の対外論の大転換を示す文章ではない。彼の脱亜的対外論はフランスのユエ占領の衝撃の下で書かれた「外交論」において初めて姿を現し、清仏戦争における中国の敗北による危機感から生じた「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」によって確立したものなのである。この脱亜的姿勢の確立の前後における彼の対外論においては、アジアとの連帯感の消失や西欧の東洋進出に対する危機感の消滅などの、明確な断絶の存在[1]が指摘できる。「脱亜論」にはこの様な画期的な意義はない。対外論一般ではなく朝鮮政策に関する転換を示すという二義的意味を持つに過ぎない。はっきり言えば「脱亜論」は福澤の文章としては、重大な意義を持つものではない。福澤自身や彼の伝記を書いた石河幹明などの忠実な弟子達や、第二次大戦前の研究者も

この文章を重視しなかった。[2] この論説が発表された当時の言論界においても、特に反響を呼んだという形跡もなかった。さらに言えばこの論説そのものが、福澤のものとしては特に優れた文章ではない。この様な文章が第二次大戦後に有名になったのは、「脱亜論」という題名の力によるところが大きいと思われる。確かに「脱亜」という力強い言葉[3]はまさに彼の対外論の転換を簡潔に要約するものであり、明治時代のその後の日本の対外政策の進路を予言した内容にもなっている。しかし題名のみに注目してこの論説の意義を過大に評価することは、福澤諭吉の対外論における転換の真相を見失わせることになる。脱亜的対外論への転換は「脱亜論」によって初めて表明されたものではない。既に一年程前の清仏戦争の進行の過程において確立されていたものなのである。この「脱亜論」という論説と、その九カ月前の脱亜的対外観への転換を同一視することによって、多くの混乱と誤解が生まれているように思われる。

「脱亜論」は明治一八年三月に、日本勢力が中国によって朝鮮から一掃された前年末の甲申事変に対する、福澤の一連の対中国強硬論説を締めくくるものとして発表された。そのために、甲申事変の挫折によって福澤はアジア連帯論から脱亜論に転換した、というのが通説になってきた。その結果、福澤の対外観の転換における、中国と朝鮮の果たした役割が過度に重視されてきた。しかし、前の章で見てきたように福澤が脱亜的転換を余儀なくされたのは、西欧における侵略的傾向を前にしての日本の独立に対する危機感が原因であった。朝鮮に対する政策的関心や、中国への評価が原因ではなかった。日本の援助による朝鮮の近代化に福澤が大きな関心を抱いていたことは事実ではあるが、所詮一握りの親日派を通じての、機会主義的な関与にすぎなかった。干渉を試み失敗して失望はしたが、彼にとって対外観を一変する程の重大事ではなかった。中国に対しても維新以来一貫して文明の落第生の反面教師として低い評価を与えてきたのであり、清仏戦争ではその弱体が暴露され、甲申事変においては意外な強さを発揮したが、福澤の中国観が大きく変化した様子はなく、対外観を修正する必要は感じなかったであろう。

さらに「脱亜論」と脱亜的転換を同一視することによって、彼の対外観の転換における侵略性が過度に強調される結果となってしまった。「脱亜」はアジア諸国の隊伍から離脱するという本来の意味よりも、アジア諸国への侵略を象徴する言葉となってしまった。[4]

しかしながら、西洋文明の東漸に対する抵抗の不可能を説き、中国朝鮮両国の事態に対する無理解故の亡国の必然性を予言して、この両国との混同を避けるために絶縁する事の必要性を主張する、全体的にはやや沈んだ調子のこの「脱亜論」

の中で、侵略的な響きのあるのは末尾近くの次の一文だけである。

「其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に従て処分す可きのみ。」(一〇巻、二四〇ページ)

この一節こそが福澤のアジア侵略論を象徴するものとして、「脱亜論」について論じた殆ど全ての文章において引用されているものである。しかしながら、「脱亜論」は甲申事変に対する彼の強硬論が容れられないことが明白になった時点で書かれたものである。当然其の文章には朝鮮の改革の夢が中国の為に敗れさった失望や無念さが現れている。(5) この言葉は感情の高ぶりから生じた言葉のはずみのようなものである。「脱亜論」からこの一文を除去したとしても、全体の論旨は全く損なわれることはない。全体的な論調からは浮き上がったこの一言で、「脱亜論」全体を代表させる従来の解釈には疑問がある。

むしろ注目すべきは「諦念の流れて」いたと、福澤の侵略性を重視する遠山氏も認めていた、この文章全体の沈んだ調子が、脱亜的対外観を確立した「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」によく似ていることである。「此文明東漸の勢に激して之を防ぎ了る可きの覚悟あれば則ち可なりと雖ども、苟も世界中の現状を視察して事実に不可なるを知らん者は、世と推し移りて共に文明の海に浮沈し、共に文明の波を揚げて共に文明の苦楽を与にするの外ある可らざるなり。」(一〇巻、二三八ページ)という「脱亜論」の一節は、次のような「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」中の文章と響き合うものをもっている。「欧米文明の風尚は世界一種の色彩となり、この色の外に在て自から一種の色相を呈するものあれば、衆寡敵せず、直接間接に其疎斥を免るゝ能はざるなり。勢斯の如くなれば西洋諸国に向ては最早異を立つるも無用なり、(中略)即ち文明の色相に蔽はれて西洋諸国との交際上に疎外を免るゝの方法にして、今の時に国を立てゝ文明国間に介在するには、此外別に策なきが如し。」(九巻、五三一ページ)「故に文明国間に独立するものと覚悟する以上は、文明の色相に蔽はれて其国を保護するの外なかる可し。(中略)我国をして耶蘇教国の仲間に入社せしめ、東西同一の色相を呈して共に文明の苦楽を与にするの策を定るは、今の経世上に一大要事ならんと信ずるなり。」(九巻、五三二ページ)

すなわち「脱亜論」は甲申事変後の対中国強硬論を断念して、改めて「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」で確立していた脱亜的対外観に復帰したことを示す文章なのである。坂野潤治氏も述べているように、「脱亜論」以降の福澤の文章からは侵略的傾向はむしろ後退したのである。(6)

確かに、西欧の侵略的傾向に対する適応である脱亜的転換に、侵略的要素は含まれていた。それは「東洋の波蘭」における、西欧の中国分割に参加する日本の未来図に現れていた。しかしながら、それは西欧の侵略と征服が本格的に開始されたら、その時には日本もそれに参入することに躊躇すべきではない、と主張しているのである。日本が先頭に立って侵略することを主張しているのではない、西欧の進出への対抗の必要を説いているのである。

「脱亜論」中のこのごく短い文章の為に、福澤の脱亜的転換における侵略的側面のみが過度に強調される結果となってしまった。この結果、転換における彼の内面の侵略的要素の分析のみが重視されて、転換を促した対外的契機が軽視される傾向が、近年の「脱亜論」重視の傾向と共に強まってきたのである。

彼の脱亜的対外観は「脱亜論」という一編の論文によって成立したものではない、危機感に迫られた苦渋に満ちた何ヵ月もの模索から形成されたものなのである。フランスの安南の首都ユエの攻略に示された、急に捕食性を強めたように見える西欧の変化に対する衝撃から生まれた、明治一六年九月の「外交論」において彼は日本は「食まれる」東洋ではなく「食む」文明国の仲間入りをすべきだという決意を表明した。東洋は西洋に対抗できないとの見通しを示した一一月の「文明進歩の速力は思議すべからず」において、アジア連帯論を明確に放棄した。その後彼は日本を西洋と同類の文明国であることを印象づける方策を探求していた。いわば保護色を身につけるための懸命の努力である。そしてベトナムをめぐる清仏戦争における中国の完敗が明白になった、明治一七年五月の「開鎖論」において日本の独立に対する非常な危機感を表明して、即時全面的内地開放や英語第二国語論に類するようなやや極端な日本社会の西欧化論を表明した。ついには翌六月の「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」において、社会の根本的要素である宗教においても西洋風にすべきだと論じて、全面的に西洋の価値観を採用して日本と西洋の同一化を完全なものにしたのである。これ以後の彼の対外関係の文章は明らかに西欧の視点から眺められている。すなわち、脱亜的対外観が確立したのである。この転換はその後の清仏戦争の再燃や、朝鮮における甲申事変などの大事件においても揺らぐことのない、不可逆的な根本的な変化であった。そしてこの転換をもたらしたものはフランスのベトナム侵略と清仏戦争の衝撃であり、世界的帝国主義時代の開始の認識であった。

この様な福澤の脱亜的対外観の確立を代表する論説は「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」である。この論文が彼の文章としては卓越した内容を持つものでないことは「脱亜論」と同様である。福澤自身にとっても危機感に迫られて余儀な

く下した苦渋に満ちた決断の書であるこの文章が会心の作であったとは思えない。しかしながら、福澤の著作中における意義は決して小さいものではない。この文章は発表されると、内外に大きな反響を呼んだ。彼の反キリスト教的姿勢は隠れもないものであったから、彼の突然の転向が国内の思想界に大きな波紋を呼んだのは当然であった。さらにこの論説をブリンクリーがすばやく翻訳して、非常に好意的な紹介[7]を付してメイルに掲載した。当時英字新聞、特にメイルは海外の報道機関にとって日本に関する殆ど唯一の情報源であったので、この文章は西欧においてもかなりの反響[8]を呼んだのであった。西欧の脅威を前にして、アジアから離脱して西欧への仲間入りの意志を表明する脱亜論は、西欧に知られて初めて意図した保護色的効果を発揮するのである。その点で福澤のこの文章は、実際的目的を果たした結果となった。すでに日本の代表的思想家として、海外にも一定の名声[9]を確立していた福澤は、その結果をある程度予見していたものと思われる。

福澤は生来宗教には全く無関心であり、このキリスト教容認論も極めて便宜的な内容なので、彼のこの転向は従来余り重視されてこなかった。しかしながら彼が如何に日本の独立を重視してきたかを考え、彼のキリスト教への反対の理由が、西洋人への心酔を育て独立心を内面から掘り崩す危険があるという重大なものであったことを思い出す時に、この転向の意義を軽視することは出来ない。彼は僅か三年前の『時事小言』では、「耶蘇宗教の蔓延は、後世子孫、国権維持の為に大なる障害と云ふ可し」（五巻、二一五ページ）とまで極言しているのである。彼がキリスト教に対する姿勢を変えたのは、キリスト教に対する認識が変わったからではない。外部からの日本の独立に対する危機感が、内面における独立心への危険性への顧慮を抑え込むほどに強くなったのである。私にはこの時の福澤の転向は彼の生涯においても数少ない、深刻な危機感に迫られての重大な転換の一つであったように思われる。政治情勢次第によって戦術的に容易に変動する、東洋に対する政策論などよりもはるかに根本的な変化であった。「開鎖論」からキリスト教容認論に至るまでの福澤の文章は異常なまでの危機感を現している。「開鎖論」においては西洋人の日本人に対する「凌辱」（九巻、四九〇ページ）の恐怖を伴った独立に対する危機感を表明し、準戦時体制に近いような鎖国論や、英語を普及させ即時内地全面開放するという開国論のような極端な二案を提示して、パニックに近いような焦慮を現しながらもどちらにも決められないような逡巡を示している。それに続く「条約改正論」は内地開放の障害となる、治外法権の不正を強く非難して即時の条約改正実現を訴えているが、これほど生の感情が表面に現れている悲痛な

感じの彼の文章を私は他に知らない。そしてついには「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」でキリスト教の容認に至るのだが、その文章は諦念に満ちた沈んだ調子のものである。

福澤は以前にも日本の独立に対する深刻な危機感を体験したことがあった。それは幕末維新の混乱期であった。福澤は維新当時の明治政府を「国を滅ぼし兼ねぬ」「攘夷政府と思込んで」いたので、その「心事は実に淋しい有様で」あった。そして「維新前後無茶苦茶の形勢を見て、迚も此有様では国の独立は六かしい、他年一日外国人から如何なる侮辱を被るかも知れぬ」が、「自分一人では勿論何事も出来ずまたその勇気もない、」「いよ〳〵外人が手を出して跋扈乱暴と云ふときには、自分は何とかして其禍を避けるとするも、行く先の永い子供は可愛そうだ、一命に掛けても外国人の奴隷にはしたくはない、或は耶蘇宗の坊主にして政事人事の外に独立させては如何、自力自食して他人の厄介にならず、其身は宗教の坊主と云へば自から辱しめを免るゝこともあらんかと、自分に宗教の信心はなくして、子を思ふの心より坊主にしやうなどゝ種々無量に考へたことがある」（七巻、一六二ページ）と自伝で回想している。

この維新期の福澤の危機感の内容とそれに対する反応は、キリスト教を容認した時の危機感の内容とその対応と極めて注目すべき類似を示している。共に日本の独立の維持を危ぶみ、日本人が外国人によって凌辱されるような事態を心配し、自分自身は信心していないのに、子供をキリスト教の僧侶にしようとしたり、日本にキリスト教の採用を勧めようとして、愛するものを宗教の保護下に置くことを考えている。すなわちこの二つの場合の反応の類似性は対外的危機の状況における彼の思考方法の原型を示すもので、福澤がこの時期維新期と同様な独立への深刻な危機感を抱いていたことの傍証となるものではないかと思われる。

この様な福澤の西欧の侵略による日本の独立への危機感を、朝鮮に対する侵略的政策を正当化するための口実に過ぎないと全面的に否定するのが、「脱亜論」について独創的な議論を展開している坂野潤治氏である。[10] 坂野氏は通説となっているアジア連帯論から脱亜論への福澤の対外論の転換の存在を否定する。福澤が使用するアジアという言葉において対象とされているのが、中国であるのか朝鮮であるのかを峻別する必要を説いて、彼が真に関心を抱いていたのは朝鮮の近代化のみで、日本の援助で近代化が有望に思えた時にはアジア連帯論的議論を主張し、その可能性がなくなった段階では脱亜論を主張しているに過ぎないと述べている。すなわち福澤の対外観の大転換と見えるものは、その時々の情勢において変動する彼の対朝鮮政策の正当化のレトリックに過ぎないと主張している。坂野氏が「脱亜論」は朝鮮に対する関与を断念

する敗北宣言に過ぎないと、その意義の過大評価に反対している点や、その侵略性を否定している点については全く賛成である。しかしながら「脱亜論」と脱亜的対外論の転換を同一視することによって、脱亜的対外論への転換の意義も否定していることには同意できない。前にも述べたように従来の研究は、甲申事変後の中国朝鮮への縁切り宣言に過ぎない「脱亜論」を脱亜的対外観の成立と見なすことによって、転換における中国と朝鮮の役割を過大に評価してきた。坂野氏はこの傾向を極端に推し進めて、遠山茂樹氏なども認めていたフランスの安南侵略の福澤の対外観への影響を完全に無視している。しかし坂野氏の、福澤のこの時期の対外論を全て対朝鮮政略から解釈する立場では、遠山氏も含む多くの人が「脱亜論」の先行的論文であると認めている「外交論」は説明できない。この論説がフランスの安南征服の衝撃から生まれたものであることは明白なのである。まして異常な危機感を表明して即時内地開放の開国論や鎖国論さえも提案している「開鎖論」は理解できないし、変動の激しい対外論などとは対照的に一貫した持説であったキリスト教の排斥を、何故この時点で放棄したのかも説明は出来ない。坂野氏はこれらの論文が含まれている岩波の選集第七巻の解説で、この時期の「福澤の対外論については、特に注目すべき点はない。」と切り捨てているだけである。

対外関係において福澤は日本の独立の維持を何よりも重視していた。その彼にとって、帝国主義時代の開幕はその独立に対する重大な危機と映ったのである。その結果、彼は苦悩に満ちた葛藤を経て、対外観を転換させたのである。福澤にあっては、二義的な価値しかなかった朝鮮に対する関心によって、この時期の彼の対外論の全てを説明しようとすることは、彼を矮小化する結果しか生まない。

(1) 時事新報紙上の福澤の対清論調を詳しく調査した青木功一氏は前掲書で、当初からかなり希薄なものではあったが、「明治一七年（一八八四）七月頃までは、日本は対西洋の関係においては清国と唇歯の関係にあるという考え方が、原則としては存在していると見てよいであろう」と述べて、その頃までは福澤が中国への連帯感を保持していたことを認めている。そして明治一七年九月二七日の「支那風擯斥す可し」においては、「唇歯論は完全にその跡を絶ったのである。」として、この時期に福澤の対外観において決定的な変化があったことを指摘している。すなわち、福澤の文中に僅かながらも感じられた中国への連帯感が、七月頃を境としてそれ以後全く姿を消したと報告しているのである。

(2) 橋川文三氏は前掲書で、「脱亜論」について、「必ずしもとくに卓抜な内容をもっていない」し、「その論旨も、この前後に福澤が何十篇となく書いている論文と大差ないもの」で、「その発表後すぐに世間の評判になったという気配もないし、福澤がこの小論をとくに回想して何かを語ったという様子もない。福澤は自分にとって快心の作であったり、なにかとくに印象深い著述であ

ったものについては、しばしばそのことを回想して語ったり、書いたりする傾向があるが、どうもそういうこともなさそうである。」と述べて、「脱亜論」が有名になったのは昭和三〇年以降のこととしている。初瀬龍平氏は、戦前には全く無視されていた「脱亜論」が注目され始めたのは、「戦後日本の思想状況が関連するようである」と述べて、その時期を一九五〇年頃としている。このように「脱亜論」という文章それ自体の、本来的な価値は決して高くはないのである。思想状況の変化という外部的要因がこの著作の評価を、実質とは関係なく、彼の代表論文という地位まで引き上げてしまったのである。

(3) 青木功一前掲書によると、「脱亜」という言葉を最初に使用したのは福澤諭吉ではなかった。明治一七年一一月に時事新報掲載の在英特別通信員・豊浦生による、「日本は東洋国たるべからず」という論説で使用されたのが初めであるという。その中で、著者は「興亜会」に反対して、日本が欧州人の侵略を避けるためには、東洋を脱して欧米の仲間に加わる脱亜こそ必要であると主張している。「脱亜」は「興亜」に対抗するものとして用いられた言葉であった。ここで注目すべきは、「脱亜」は欧州の侵攻の危機から日本を救う防御的方策として提唱されたことである。後に福澤が、この言葉を借用して「脱亜論」を書いたときにも、この本来の言葉の防衛的意味合いが見失われていたとは思えない。

(4) 坂野潤治氏が次のように指摘している。「「脱亜論」はアジア侵略の代名詞のように扱われてきた。「ふつう福澤の「脱亜論」は、彼の「アジア改造論」から「アジア侵略論」への転換を示す論説として引用される。福澤についてのみならず、「脱亜」という言葉は、日本のアジア侵略の代名詞として使われるのが普通である。」(『明治・思想の実像』) 例えば、岡義武氏は「国民的独立と国家理性」(『近代日本思想史講座』第八巻(筑摩書房)昭和三六)において、福澤の「脱亜論」を自由民権派の杉田定一や大井憲太郎の主張と共に、大陸進出論の例として紹介している。そして、日清戦争以後の日本の大陸進出の時期の章を、「「脱亜」の時代」と題して、日本のアジア侵略を福澤の「脱亜論」の実現過程として叙述している。

(5) 橋川文三前掲書「「脱亜論」の語気の激しさは、当然この事変の余波をとどめているものと見てよいであろう。」この語気の激しさと、多くの人が認めている、「脱亜論」における諦念の調子や断念の響きが、この論文が転換を示す文章として過大に評価される原因をつくったのかも知れない。

(6) 坂野潤治氏は、「(福澤の)「脱亜論」を唱えていたときの対外論は、膨張主義ではなく現状維持論であった。」(『明治・思想の実像』) と指摘して、「福澤の「脱亜論」をもって、(中略)彼のアジア侵略論の開始であるとかいう評価ほど見当違いなものはない。」(『福澤諭吉選集』第七巻解説) と断言している。坂野氏のこの指摘は、それ以前の「脱亜論」に関する通説を、根本から覆すような重大な批判である。従来の「脱亜論」に関する議論は、「脱亜論」が侵略論であることを自明の前提として組み立てられていたからである。

(7) ブリンクリーが以前に刊行早々の『時事小言』の抄訳をメイルに連載して、それが海外でも高く評価されたことは前にも紹介した。後にメイル紙上においてブリンクリーが『時事小言』の批

評をしたときに、最も強く批判したのが、福澤の反キリスト教的意見であった。それ故今回の福澤によるキリスト教容認への転換は、彼にとって大いに歓迎できるものであった。彼はこの論説の紹介文の中で、この転換が余りにも便宜的であるという予想される批判に対して、福澤は何よりも日本の独立を重視する実際的哲学者であるので、その宗教的転向を軽薄と批判するのは当たらない、と予め弁護している。

(8) メイル紙上に現れた反応だけでも、次のようなものがある。英国の東洋専門誌のロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレスは、メイル紙の「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」の翻訳文をそのまま転載したが、やや批判的に論評した。有力新聞のペル・メル・ガゼットは、日本の代表的な思想家がキリスト教の優越を認めた、と報じた。英国を代表するザ・タイムズ紙も、後になって日本の近代化について論じた記事の中で、有力な思想家がキリスト教採用を勧めた事実に言及して、福澤のキリスト教採用論を既に承知していたことを示している。

(9) 福澤が海外において思想家として評価されたことを示す最も代表的な例は、彼の『時事小言』をオーストリアの高名な法律学者フォン・シュタインが、西欧の学問的水準においても一流のものであると、わざわざ激賞の書簡を寄せた事件である。(参考、序、註(6)早島論文)この『時事小言』がメイル紙上にブリンクリーによって翻訳掲載された事実が示すように、この福澤の海外における名声のかなりの部分はブリンクリーによるところが大きかった。ブリンクリーは福澤諭吉を、日本の社会の近代化のために最も貢献した優れた思想家であると高く評価していた。そしてメイル紙上の邦字新聞の翻訳欄には、他のどの新聞よりもはるかに多く時事新報紙上の論説を掲載し、その内容を重視していた。海外における日本に関する殆ど唯一の情報源であったメイルの、福澤に対するこのような高い評価や多くの文章の翻訳掲載は、福澤の海外における名声の確立に最も寄与したものと思われる。多少とも日本に関心をもっている人々という限定された範囲ではあるが、海外における福澤の日本の代表的思想家としての地位は、現在想像される以上に早くから確立していたのである。

(10) 坂野氏は以下の諸論文において、「脱亜論」を中心として福澤の対外論についての通説の批判を精力的に展開し、今や丸山説に代わり新たな定説と化した感がある。「明治日本の転換点」(『歴史と人物』(中央公論社)一九七三年)、「「東洋盟主論」と「脱亞入欧論」」(『近代日本の対外態度』東京大学出版会、一九七四年)、『明治・思想の実像』(創文社、一九七七年)、『福澤諭吉選集』第七巻解説(岩波書店、一九八一年)、「明治初期(一八七三-八五)の「対外観」」(『国際政治』第七一号(国際政治学会編)有斐閣、一九八二年)

おわりに

最後に福澤諭吉の対外論についての代表的な論文における、「脱亜論」についての取扱い方を年代順に紹介し、その意味するものを検討してみることにする。

福澤の「脱亜論」は彼の対外論を代表するものとして、最

近四〇年間の間に時が経つにつれて益々重大視されるようになってきた。そのことを象徴するのが岩波の新旧の『福澤諭吉選集』における取扱いである。昭和二七年の旧版においては収録さえされなかったものが、新版においては彼の対外論を集めた第七巻の外箱の表面に時事新報掲載当時の冒頭の部分が印刷されている。「脱亜論」は福澤の対外論の象徴として扱われているのである。

しかしながら、「脱亜論」が福澤の対外論を代表するものとして強調されるにつれて、彼の対外論の転換の真実からかえって遠ざかってしまったような印象を受ける。昭和二七年の旧選集第四巻の解題において丸山真男氏は、福澤の対外観の転換を「駆り立てていった外部的な契機が、当時の日本をめぐる国際的環境にあった」ことを指摘して、それが「ヨーロッパ帝国主義時代の開幕という現実である。」と明言している。その国際的環境に対する彼の危機感を示す文章として、「開鎖論」や「条約改正論」から引用している。そして朝鮮中国の自主的な近代化の可能性の絶望と、西力東漸の急ピッチの恐怖から、アジアに対する政策を転換させたとしている。このような丸山氏の解釈は、大枠としては極めて正確なものと私には思える。

岡義武氏は、昭和三六年の「国民的独立と国家理性」の中において、日清戦争後の日本の大陸進出の時期を「「脱亜」の時代」と名付けて、対外論としての「脱亜論」を重視する態度を示している。そして「脱亜論」を「大陸進出論」ととらえて、その侵略的要素を重くみている。それでも、その中国分割参加論が、「西力東漸」の進展に対する「烈しい不安と恐怖」による、「民族の独立を確保するための方策として構想された」と述べて、西欧の脅威による独立への危機感が果たした中心的な役割を見逃してはいない。

昭和四五年の遠山茂樹氏の『福澤諭吉』になると、このような福澤の独立に対する危機感を全く認めていない。「脱亜論」をもって帝国主義への積極的適応を示すものとするこの著書において、福澤の対外関係の文章を彼の侵略的傾向から解釈する姿勢で一貫している。フランスのベトナム侵略に示された帝国主義時代の開幕が福澤に影響を与えたことは認めているが、彼の朝鮮侵略の意欲を増進させたものとしてしかとらえられていない。

坂野潤治氏は昭和五二年の『明治・思想の実像』などにおいて、「脱亜論」は福澤の朝鮮進出の放棄宣言であるとし、アジア侵略論の開始であるとの通説を否定した。しかしながら、坂野説においては、「脱亜論」自体の過大評価は否定されているものの、それまでの「脱亜論」重視の結果から生じていた、福澤の侵略性の強調や、彼の対外論を中国朝鮮への関心を中心に解釈する傾向は、むしろ強化された。坂野説で

は、確かに「脱亜論」の侵略性は否定されたが、福澤の当時の対外論全体を朝鮮に対する侵略的政策の正当化の試みとみなすことによって、福澤の侵略的傾向は以前にもまして強調されることになった。西欧の脅威に対する福澤の危機感の表明さえも、朝鮮侵略を正当化するための口実であると、彼の侵略性を示すものとみなされることになった。

以上のような福澤の内的契機である侵略性を重視する傾向の中で、中国や朝鮮に対する彼の評価や関心がどのようなものであったかについては、幕末時代にまで遡って非常に詳細に研究されてきた。それに対して、丸山氏が、福澤を転換に駆り立てた外的契機であるとした、帝国主義時代の開幕の実態の解明については殆ど無視されてきた。私はこの論文で帝国主義時代の開幕を福澤がどのように受けとめ、彼がその事態にどのように反応したのかを、福澤の文章の中に跡づけてみようと試みた。帝国主義時代の開幕は東アジアにおいては、フランスのベトナム侵略という形をとって現れた。フランスのユエ征服に対する衝撃から生まれた「外交論」によって初めて姿を現した脱亜的対外観は、清仏戦争における中国の敗北がもたらした危機感の中で、「宗教も亦西洋風に従はざるを得ず」によって、確立したのである。世界的な帝国主義時代の開始に直面して、彼は国際社会における日本の位置づけを転換させたのである。この転換は突然侵略的傾向を増した様に見える西欧の脅威を前にしての、日本の独立への危機感がもたらしたものである。彼の中国や朝鮮への関心や意図は、転換には何の役割も果たしていない。「脱亜論」は彼の朝鮮への冒険的干渉の試みの失敗の後に、朝鮮に対する関与の放棄を宣言して、すでに確立していた脱亜的対外観を改めて確認したものに過ぎない。「脱亜論」に対する過大な重視が、帝国主義時代の開幕に対しての受動的反応であるという、福澤の対外論の転換の実相を覆い隠してしまった。「脱亜論」の評価をそれにふさわしい地位に引き下げ、その過大評価から生じた彼の対外論への解釈を見直すことが必要である。